

シュメル語の動詞接中辞について

小 脇 光 男

ここで述べる接中辞とは、一般に *dimensional infix* と称せられているものである。この接中辞は、バビロニアの文法家が残した文法テキスト中の術語 *MURU·TA* 《中から》に相当するものである。

シュメル語の接中辞は、未だ十分な研究がなされていないけれど、シュメル語文章の正確な解釈という点で、接中辞の意味、機能を解明することはかなり重要なことである。特に動詞と接中辞の関係は、興味を引く問題のひとつである。

- (1) 接中辞 *-da-* (*comitative*) に例を取って、その動詞との関係を調べてみると、大体次のような傾向があると考えられる。すなわち、恐れ、喜び等の感情を表わす動詞は、接中辞として *-da-* を取る傾向が見られる。

MSL. I. Tf. 7 N

- (1) *tukum-bi* (2) *dam-e dam-na hul ba-an-da-gig-a-ni*
=*šum-ma aš-ša-ta mu-us-sa i-zi-ir-ma* “Wenn eine Frau
“gegen ihren Gatten Abscheu faßt und...”

Gudea Cyl. B14

- (23) ...*dumu d. en-líl-la-da* (24) *ní mu-da-ab-te-te*
“sie haben... vor dem Sohn Enlils Angst.”

ibid. 20

- (14) *é-da lugal im-da-hul*

“über das Haus freute sich der König.”

etc.

- (2) 接中辞は後置詞に呼応して現われるものであるが、接中辞に呼応すべき後置詞が現われていない時、とりわけ接中辞が指し示す語が文章中に無い場合、この接中辞をどのように理解すべきか最も見解の分れるところである。例えば *sag-še mu-ni-rig* “捧げる”に於ける接中辞 *-ni-* は後置詞 *-še* に呼応しているとする説と、*dative-na-* として使用されているとする説 (A. Falkenstein) があるけれど、どちらの説を支持するかにより、接中辞 *-ni-* それ自体の全体的な見解も変わってくるので、現段階ではにわかにはどちらとも決定し難い。